

近代作家研究叢書74

監修／吉田精一

白秋研究

短歌編

木俣 修著

解説／横尾文子

日本図書センター

白 秋 研 究 I 短 歌 篇

著者略歴

1906年滋賀県に生る。歌人。昭和女子大学教授、
短歌雑誌『形成』主宰。主要著作・歌集『高志』
『冬暦』『木俣修歌集』研究評論集『北原白秋』
『近代短歌』『近代秀歌』『評釈小倉百人一首』
等



昭和 29 年 11 月 15 日 第 1 刷発行 定価 280

著 者	木 俣 修
発 行 者	小 山 芳
印 刷 所	ム ラ マ ツ 印 刷 所
	東京都新宿区四谷二ノ四

発 行 所 新 典 書 房

東京都新宿区舟町七番地
振替東京 一五九五八番

萬一落丁本は本社にてお取替いたします

白秋研究 I〔短歌篇〕 目次

はしがき

『文庫』『明星』時代の歌……………一

『桐の花』序説……………五

『桐の花』鑑賞……………一五

『雲母集』序説……………八八

『雲母集』鑑賞……………九五

『雀の卵』序説……………一〇六

『雀の卵』鑑賞……………一三三

『風隠集』『海阪』概説……………二六

『白南風』	『夢殿』概説	二五
『溪流唱』	『橡』の時代	三四
『橡』小論		三〇
『黒檜』の時代		二六
『黒檜』小論		二五
『黒檜』鑑賞		二九
北原白秋先生		二六
北原白秋年譜		二九

『文庫』『明星』時代の歌

北原白秋の短歌への出発は明治三十五年十月の『文庫』に始めて

ほの白う霞漂ふ薄月夜稚き野の花夢淡からむ（原作第二句「葉の葉に霞む」）

という一首が掲載された時と見てよいであろう。その時、十八歳。白秋は五十八歳で世を去つたのであるから、断続は少々あつたにしても四十年間他の多くの詩業と共に、歌をも作り続けて来たわけである。

『文庫』歌壇には三十七年一月まで十二回にわたつて、二百首近く発表している。

夕されば天なる恋をうつくしみ夢見るらしき野の月見草（35・11）

花守は園に眠りて春の日の白日静かに花の香迷ふ（36・1）

蜜吸ふと葢に下りたる若き蝶の罪に暮れゆく紅芙蓉の花（36・2）

被^{かつぎ}衣して妻戸いづれば薄月夜梅も霞みて春の雪ふる (36・3)

平和の小野のにはひの雲と凝りてほのかに春の愁さそふや (36・11)

寂寥^{さびよう}は幽かに薰る青潮の遠音のごとも胸に沁みいる

小野は春の緑かよはき朝嵐罪あたらしき頬をもこそ吹け (36・12)

柿古りぬ。春を戯^ざれよる猿もあらじ。蟹がお宿は山吹の雨 (37・1)

春浅うわれは散る花。若草のよろこびにほへ、君にみ袖に

こうした歌が当時の白秋の歌である。選者は落合直文門下の服部躬治、後に「いかづち会」という新派和歌の会を興した人であるが、白秋は必ずしもこの人の歌風を尊敬していたわけではなかつた。当時『明星』の粉黛の多い粗豪な歌よりも、万葉風を加味した比較的平明な文庫歌風を愛好したので、これに拠つたものである。これらの歌はすべて若々しい浪漫的情感によつて貫かれており、その歌口の中に、既に後年の白秋調を思わせるようなものが見られる事は興味が深い。三十七年末、躬治選歌の態度に嫌らない事があつたので、彼は歌作を中止してその詩壇に移つて詩作に精進し始めた。詩壇の選者は河井醉茗。醉茗は忽ちにその天稟を認めて優遇した。「月下の默想」(三十七年)「全都覚醒の賦」(これは最初『早稲田学報』に出て、後『文庫』にも出た。)
「春海、夢路」「絵草紙店」(三十八年)等は詩人としての白秋の位置を定める事となつたものである。然しやがてこの詩壇にも不満を感じようになつて三十九年、新詩社の与謝野鉄幹の慫慂によつて『明星』に移つた。そしてやはり詩作に天稟を縦横にふるい、その存在を愈々大きく

世に認めしめたのである。

これよりさき三十七年十月、白秋は『明星』に歌を投じて六首採録されている。その頃『明星』歌壇においては、吉井勇・平野万里・茅野蕭々等の人々が活躍を始めていたのであるが、白秋の歌の待遇はこれらの人々のものより悪かつたので、彼は一回切りで投書を止めたという事実があった。

燃ゆる眼に千人^{ちんたり}なづくるうまし男^{おとこ}とほこりておはせ君わかうして
ほととぎす花に水鳴る山の花むらさきゆらぎちる山の花

という歌がその六首中の二首である。『明星』詩壇の第一人者とはなつたが、彼はこうしたわけでもその歌壇に近づくことを潔しとせず、当時新詩社同人の行事として有名だつた一夜百首会などにも殆んど出席する事がなかつた。ところが四十一年の六月に六十二首の大作を『明星』に発表した。たまたま出席した一夜百首会において成つたものである。

青の馬御すと来りぬ世に一の真大胆^{まいたんこ}子の大気^{たいき}の童子^{わらよ}
懶うげに牛かもひそむ夕されば蠢^{うご}めき吼^こゆれわが重き額^{かぶ}
夏の昼赤き郵便^{ゆうびん}函の胆^は抜くと鬼かも来る街に人なし
血のごとき赤き帆^ふきたる聞^{きこ}として人絶え港白ばむ真昼

ああ皐月髪のにはひと帯の緋とまぼろしに蒸す日頃となりぬ

夕焼の高窓みあげ南国の街に入りぬと角吹く馭者は

深海の底に魚燃ゆいな森の巨獸か赤き自動車きたる

日は真昼遠いかづちす熊蜂の巢の白ぼみに罌粟の花ちる

さきに『文庫』に出詠した歌とこれ等の歌を比較して見る時、官能が鋭く、象徴味が深く、語彙が富胆であつて、異常な進歩飛躍が認められる。これ等の歌は、当時の彼の詩と交流するものであつて所謂「明星調」というものとは相異つた個性的な一新流風をうち建てているものであることも認められる。その後二回にわたつて、百十二首を同誌に発表しているのであるが、四十年末に吉井勇、木下奎太郎、長田秀雄等と共に新詩社を離れてしまつた。世間では、当時及びその後『スバル』等に発表した白秋の歌を、明星派の流風の中に数えているけれども、よく調べて見ると決して白秋の歌は真の意味の明星派ではないという事が出来るのである。彼はむしろ明星の本流から見ると一つの反逆児であつた。白秋は最初から白秋であつたという事が出来ると思う。

『文庫』『明星』時代の歌は遂に白秋の単行歌集とは成らずに終つた。白秋自身この期の短歌作品に対して、自己の文学精神史の上から見て愛着と重要性とを感じてはいたが、さして高い価値を認めていなかったようである。

『むらさき』昭和十八年二月

『桐の花』序説

1

明治四十二年から同四十四年に至る三年間は、北原白秋の生涯における最も多彩絢爛なる一時であり、その芸術活動の上において最も重大な意義を有する一時期であつた。その三年間の活動年譜にたずねることから小論を出発せしめたいと思う。

明治四十二年（二十五才）

一月、石井柏亭、山本鼎、高村光太郎、木下杢太郎、吉井勇、長田秀雄とパンの会を起す。

三月、処女詩集『邪宗門』を半ば自費にて出版。

十月、木下杢太郎、長田秀雄と異国趣味の雑誌『屋上庭園』を刊行す。

五月、九月、十一月、雑誌『スバル』に詩以外更に短歌をも発表。合せて百五十七首なり。茲に初めて『桐の花』新風を樹立す。

この年、神楽坂の物理学校裏に住み、秋に入り動坂に移る。十一月『方寸』同人と信州大屋に遊び十二月は実家の財的破綻に際し、一時帰国す。

明治四十三年（二十六才）

前半期を牛込新小川町に寓居。パンの会の盛時なり。詩興横溢。詩集『思ひ出』『東京景物詩』歌集『桐の花』の主要作品成る。

この年二月、『屋上庭園』二号にて廃刊す。若山牧水、雑誌『創作』を発刊す。その誌上、三月より翌年七月に至る期間短歌の寄稿百六十首なり。

五月、青山原宿に移る。

明治四十四年（二十七才）

二月、木挽町二葉館に下宿す。五月、出世作『思ひ出』公刊。

九月、光栄ある『思ひ出』の会開催さる。文壇における此の種の会の紀元なり。席上、上田敏の激賞を受け驚きあまりて答うるところなし。

七月、筋肉炎手術のため岩佐病院に入院。

九月、飯田河岸金原館に転宿。十一月高踏的純文芸雑誌『朱鑽^{ザムボウ}』を主宰、東雲堂より発刊す。爾来此誌に載せたる歌、五百五十余首なり。

十月、『文章世界』誌上、明治十大文豪投票の結果、その中の詩人として第一位に入選。最年少者なり。柳敬助筆の肖像画を贈らる。地位定まり、はじめて父の喜ぶところとなる。

この冬、新富座裏に仮寓、愈々江戸の情調と東京景物に親しむ。なお、この年はじめて短歌の選に關係す。時事新報のそれなり。（白秋の手記による）

明治三十年の前半期において華やかに開頭した浪漫主義の潮流は、その後半期における西欧詩壇の新潮流の紹介によつて漸次象徴主義的な傾向を帯びて来るようになった。二十世紀のはじめ以後、英仏においては象徴詩運動が盛行していたのであるが、その新声がいち早く上田敏、永井荷風等によつて我国に伝えられた。訳詩集『海潮音』『牧羊神』（敏）『珊瑚集』（荷風）等がその業績である。それ等の異国のひびきはやがて蒲原有明の『春鳥集』、薄田泣菫の『白羊宮』等の詩集の中に奏でられる事になつて、日本にも象徴詩と称すべきものが誕生したのである。『文庫』詩壇を経て、明治三十九年には『明星』に入つてその詩壇において華々しい活躍をしめし、敏、有明、泣菫等の先輩に認められるようになった白秋が浪漫主義、象徴主義の薰染を受けて来ない筈はなかつた。明治四十三、四年の頃は前掲の年譜を一瞥しても解るように特に我国詩壇の青春期とも言ふべき時期を現出したのであるが、白秋は他の俊秀と共に自らの青春の才華をこの期において、こころゆくまで輝かす事が出来たのである。詩集『邪宗門』『思ひ出』が公刊され、詩集『東京景物詩』歌集『桐の花』の主要作品が次々と生れて行つたのも、すべてこの時代であつた。これ等夥しい白秋の業績の各々が、詩歌の歴史の上に一時期を劃した事を思う時、詩人白秋は若くしてすでに王冠を頭上にかがやかせたものと言ふべきである。

当時白秋は詩作が主であつて短歌の制作は従であつた。にもかかわらず短歌作品の上にも、よく『桐の花』の新風を樹立して和歌史の水脈の上に空前の新しい一光芒を放つたということが、本章の当面の問題となつて来るのである。

白秋の短歌制作は既に中学の三、四年の頃から始まつていたのであるが、今日残つてゐるのは

明治三十五年十月号の『文庫』に発表した作品以後のものである。『文庫』には総計百七首の歌を発表し、後『明星』に移つて、ここでも総計百七十四首の歌を発表している。これらの歌においても既にその稟性は著しく輝かされてはいるが、なお且つ『文庫』調、『明星』調から全く抜け出ているものとは言い難い。ところが明治四十二年五月『スバル』に発表した「もののあわれ」六十三首に至つて初めて白秋独自の歌風、所謂『桐の花』の新風を樹立したのである。その後、明治末年頃に至る迄の間に『スバル』『創作』『朱薬^{アカガサ}』等に相次いで発表した歌は六百余首であつた。その中から四百首余りを選抄して、大正二年一月世に問うたものが抒情歌集『桐の花』である。この上梓は第二詩集『思ひ出』の上梓から一年七ヶ月の後であつた。

2

『桐の花』の初版本は、活字面の構成、黒と朱の印刷、貼りつけになつてゐる小挿繪、目次を書後に置いた体裁、装幀、包装、用紙等の総てが、著者自身の独創に成つたものであつて、この書物自体が、当時の白秋の芸術、ひいてはその頃の時代性を象徴していると言つてもよい。収載の作品に見られる感覚、官能は全くこの書物の体裁と寸分の隙もない程よくマツチしているのである。『桐の花』の作品は後年、選集・全集その他によつて幾度か世に送られているが、それ等の書物によつては、『桐の花』の世界を真に味わう事は出来ないとさえ思われる程である。

かの『思ひ出』が「時は過ぎた。さうして温かい刈麥のはめきに、赤い首の螢に、或は青いといふの眼に、黒猫の美しい毛色に、謂はれなき不可思議の愛着を寄せた私の幼年時代も何時の間

にか慕はしい『思ひ出』の哀歎となつてゆく。」に初まる序文によつて、その詩集としての価値を一層高めているように、『桐の花』もその中に「桐の花とカステラ」「昼の思」「植物園小品」「感覚の小函」「白猫」「ふさぎの虫」(「ふさぎの虫」は再版以降削除された。)の六篇の散文詩風の小品が挿入されている事によつて一人にこの集の香気を高め、この集を特異なものにしてゐる事を見落してはならない。中でもその巻頭にあつて、自ら序の如き体裁になつてゐる「桐の花とカステラ」及び歌を隔てて、その次に挿入されている「昼の思」は、当時の白秋の短歌に対する考えを述べた試論とも言ふべきものであつて、特に尊重さるべきものである。これらの小品は『思ひ出』の序文とともに後年の散文芸術の上にも少なからぬ示唆と影響を与えたものである事も序に附け加えておこう。

3

試論「桐の花とカステラ」の中で白秋は「短歌は一箇の小さい緑の古宝玉である。古い悲哀時代のセンチメントの精^{エッセンス}である。古いけれども棄てがたい、その完成した美しい形は東洋人の二千年の悲哀のさまざまな追憶^{追憶}に依てたとへがたない悲しい光沢をつけられてゐる。その面には玉蟲のような光やつゞましい杏仁水のような匂乃至一絃琴や古い日本の笛のような素朴な Tied のリズムが動いてゐる。なつかしいではないか、若いロセツチが生命の家のよるこびを古いソネットの形式に寄せたやうに私も奔放自由なシンフォニーの新曲に自己の全感覚を響かすあとから寥しい一絃の古琴を新らしい悲しい指さきでこゝろもちよく爪弾したところで少しも差支へな

い。」私の哀しい Nostalgia がまた一絃の古琴にたまたま微かな月光の如くつかずはなれず付纏ふ時に、ある若い人達の集団はこれを唯一の楽器として、行往坐臥、凡ての清新な情緒センチメンタルと凡ての若い神経の悦楽とを委ねて満足してゐる。新人の悲哀は古い詠嘆の絃にのぼせて象徴の世界を観照すべくあまりに複雑であり深刻であり而かも而かも傷ましいほど痛烈である。「私の詩が色彩の強い印象派の油絵ならば私の歌はその裏面にかすかに動いてゐるテレピン油のしめりであらねばならぬ。」と述べている。

当時の白秋にとつて詩は近代人としての自己の若い生命の全感覚、全官能を響かすに足るべき、いわばシンフォニーの如きものであつたが、歌はその背後の弱く寥しい哀調をのみ盛るべき、いわば一絃琴の如きものであつたのである。歌という伝統的な古形式はあだかも緑の古宝玉の如きものであつて、それ以上の重荷を負わせるべきものではないと考へていたのである。詩は青春の闘いの場を描くものであり、歌はその憩いの場を表現するものであるという考へにたつていたのである。詩作が主であり、歌作が従であつたと言うことは、実はこうした事情を意味していることなのである。このように制作態度の上において詩作と歌作とを区別し、そしてそれに従つて両方の道に新しい仕事を進めていくということは、誰にでも出来得るものではない。白秋の比類稀なる稟性のみがひところうした二つの道に輝かしい業績を残さしめたのである。従つて『桐の花』は制作態度の上においてすでに一つの特殊化が遂げられている事になるのである。

『桐の花』の歌の性格は既に前の引用文の中に多分に示されているのであるが、更に「桐の花とカステラ」の中から「新様の仏蘭西芸術のなつかしさはその品の高い鋭敏な新らしいタツツの面

白きにある。一寸触つても指に付いてくる六月の棕櫚の花粉のやうに、月夜の温室の薄い硝子のなかに、絶えず淡緑の細花を顫はせてゐるキンギン草のやうに、うら若い女の肌の弾力のある軟味に冷々としみいづる夏の日の冷めたい汗のやうに、近代人の神経は痛いほど常に顫へて居らねばならぬ。私はそんな風に感じたいのである。「私の新しいデリケートな素朴でソフトな官能の余韻はこの古い本来の哀調の面目を傷けぬほどの弱さに常に顫へて居らねばならぬ。」等の文章を拾い、「昼の思」の中から「芭蕉の寂びはまだうら若い私達が落ちつくところではない、少くとも世を楽しむメエテルリンクの悲愁と神秘な蒼い陰影の霧の中に寂しい心の在所を探す物馴れぬ Stranger の心持、その心を私は慕ふ。」という一節を見つける事によつて、更に明確にされるものと思う。

白秋はあくまでも近代の香気と気品とを以てこの古い伝統を負う形式を輝かそうとしたのである。仏蘭西印象派の感覚や象徴派の官能によつて古風な一絃琴を奏でようとしたものである。気分・陰影・情調というものを何にもまして尊び、感覚・官能の頽廢の中における青春の怡悦を歌に盛ろうとしたのである。更に言えば香いと香いと陰影、声なき声、現と幻との境、このやうなもののあわれへの果敢ない思慕を海外の新しい詩の手法によつて歌おうとしたのである。このやうに、最も古い伝統の殻を負う短歌文学に、清新な異国的な詩情を盛り、短歌の中に新しい感覚官能を解放したという事は、実に空前の事業であつたのである。同時代者が見る場合においてはこうした事は案外はつきりしないかも知れないのであるが、何十年何百年の後、この歌集が回顧される時は、こうした事が一層鮮明に浮き上るであらう事を私は確信するものである。

以上の立論は、本集のそれぞれの歌を詳細に研究して行く事によつて、漸次具体的に解明されて行く事になるのであるが、ここに少しばかり『桐の花』の新風を代表するような歌を抄出しておく事しよう。本書における研究は初めの方の「銀笛哀慕調」「初夏晚春」二章の全部にわたつて行つたものであるから、抄出は重複を避けてそれ以後のものからにしたいと思う。

「薄明の時」より

美しくしきかなしき痛き放埒の薄らあかりに堪へぬころか
 フラスコに青きリキユールさしよせて寝ればよしなや月さしにけり
 やるせなき春のワルツの舞すがた哀しくるほし君の踊れる
 わが世さびし身丈おなじき茴香も薄黄に花の咲きそめにけり
 いそいそと広告燈も廻るなり春のみやこのあひびきの時
 夏よ夏よ鳳仙花ちらし走りゆく人力車夫にしばしかがやけ

「雨のあとさき」より

あまつさへキヤベツかがやく畑遠く郵便脚夫疲れくる見ゆ
 新らしき皮膚の痛みかたましひの心の汗より来るなげきか